

講演「震度7を生き抜く一中越地震被災地医師が得た教訓」（概要メモ）

講師：田村 康二 医療法人長岡市立川メディカルセンター常勤顧問

「震度7を生き抜く一中越地震被災地医師が得た教訓」をテーマに講演が行われました。講演内容は、1. 地震直後の状況と行動、2. 家屋の被災状況、3. 災害医療体制の整備、4. 地震対策、5. 地震から得た教訓となっています。講演内容の概要は次のとおりです。

1. 地震直後の状況と行動

40年前の新潟地震を体験し、地震への備えとして可能な限りの防災対策を講じていたが、今回の中越地震でマンションの10階で体験した震度7の揺れは想像を絶した。立ってられないほどの状況の中で、医師の立場で、直後にとった行動は、避難場所としてのホテルの宿泊予約、タクシーでの移動であった。1週間のホテル避難生活によって、災害医療行為が出来たことは、先の体験が活かされたと言える。いっどこで被災するか分からないから、家具の固定はもちろん、危険性の高い場所は避ける、明かりの確保、火事の防止、正しい情報の入手、避難場所の確認などは常に心がけておく必要がある。しかし、もし、被災してしまったら、とにかく、自力で逃げる。同時に人手を必要としている隣人への援助を行い、落ち着いて、24時間を耐えることが出来れば、公的な援助も期待できる。使命感に燃える救援隊でさえ被災している状況を理解し、3日間は自助、共助の心構えで、生き抜くことが大事であるとの説明がありました。

2. 家屋の被災状況

マスコミによって、長岡が全て壊れたように思うのは誤解である。断層がわずか、1キロメートル離れただけでも、また、歴史に裏づけられた強固な地盤の有無によっても被災状況は全く異なる。昔、沼地だった所に建てられた新興住宅は全て倒れ、長岡城郭址の駅前マンションの自宅は無傷だった。たとえ地盤が悪く、築年数が長くとも、断層から離れているところでは建物は倒れていなかった、この地震による家屋倒壊被害の多くは地質専門家にも分からなかった越後平野に縦横無尽に広がる「隠れ断層」の影響によるものだったとの説明がありました。

3. 災害医療体制の整備

災害に対する医療準備体制は日頃から十分に整備しておく必要がある。特に、心臓が止まったときに電気ショックを与えて蘇生させる機械（AED）は全ての公共施設に備えたい。長岡では約50人が地震のあとに心筋梗塞で亡くなっている。被災地では騒音のトラウマで公害ともいえる救援ヘリコプター1台分で、心臓蘇生機械が数百台も買える。或いは心臓マッサージの方法を学び、身に付けておけば救援活動が出来た。アメリカのシカゴ市のように住民の救急医療教育が徹底していれば、自分、家族、隣人に対して貢献できるとの説明がありました。

4. 地震対策

地震対策で出来ることは地盤を確認することである。長岡で、どこにどれだけ被害があったというデータを持っていながら公表しない行政に対し、住民は強く請求しなければいけない。子々孫々に至るまで安全に住むためには情報が絶対に必要なのだから、とくに、行政が持っている詳細な情報を公表してもらわなければ住民はどうにもならない。この住民側の強い意志を行政側に示すことが必要との説明がありました。

5. 地震から得た教訓

地震を2度経験した私は、地震の怖さを一生忘れないだろう。人間は苦しさを一生忘れられない。これは大変な負の財産である。地震にあつて恐怖のトラウマに陥らないように出来るだけの対策を講じることは、絶対に大事なことだと思う。そして最も大事なことは、物や金ではなく、自分の知恵と人々との連帯であり、これが何よりの財産だと痛感させられたとの説明がありました。